研　究

アタッチメント行動チェックリスト Attachment Behavior Checklist：ABCL の開発に向けての予備的研究

—児童養護施設におけるアタッチメントを評価するために—

青木　豊[1,2]，南山今日子[3]，福榮　太郎[4,5]，宮戸　美樹[5]

〔論文要旨〕

本論文では，乳幼児のアタッチメントの安定度を測定するアタッチメント行動チェックリスト ABCL を作成し，その信頼性と妥当性の検討を行った。児童相談所に調査を依頼し，ABCL，養育問題のある子どものためのチェックリスト CMYC，子どもの行動チェックリスト CBCL をそれぞれの施設担当職員が回答した。評価対象となったのは，９つの児童養護施設に入所中の月齢10～50か月の乳幼児である。まず，ABCL 項目について因子分析を行った結果，「こころの理解」，「感情調節不全」，「安全基地」の３因子が抽出され，それぞれの信頼性が確認された。また，アタッチメントの安定度が低い「感情調節不全」が強い子どもほど CMYC のトラウマ，感覚･行動調節が高く，入所期間の長さとアタッチメントの安全度の高い「安全基地」との関連が明らかになった。以上のことから，本研究で作成した ABCL が，子どものアタッチメント行動の安定度をある程度推定することができることが示唆された。

Key words：アタッチメント，質問紙，信頼性・妥当性，乳幼児

Ⅰ．目　　的

本論文の目的は，乳幼児のアタッチメントを測定する質問紙「アタッチメント行動チェックリスト（Attachment Behavior Checklist）」（以下，ABCL）の作成過程を示し，その信頼性・妥当性を検討することである。

近年アタッチメントの重要性はさまざまな分野で広がりを見せている。児童精神科医療，小児科医療，児童相談所，乳児院・児童養護施設，里親養育の現場，乳幼児健診，保育園，幼稚園，各種育児支援の機関などで，アタッチメントは，子どもと養育者（代理養育者も含む）の関係性の評価・介入において，重要な視点の一つとして捉えられている。しかしその評価法が十分に確立されていないことが，アタッチメントという有用な概念を臨床現場で有効に活用できない要因の一つとなっている。現在国際的には，乳幼児から前学童期におけるアタッチメントを測定する手法として，Strange Situation Procedure（以下，SSP）[1] と Q-sort[2,3] が確立されており，この２つの手法の信頼性・妥当性は，多くの研究によって確認されている[1~3]。しかし，SSP はビデオ・モニターなどの設備が必要となり，施行可能な機関は数少ない。また Q-sort は，アタッチメントに関連する90の観察項目が１つずつ１枚のカードに書かれており，家庭訪問で養育者と乳幼児を観察し，カードの観察項目がどれぐらいの頻度で見られたかに基づきカードを並び替え，その結果から乳幼児のアタッチメントの安定の程度を評定するというもの

Developing the Attachment Behavior Checklist：ABCL and the Examination of Its Reliability and Validity　〔2542〕
受付 13. 6.27
採用 14. 9.18
Yutaka Aoki, Kyoko Minamiyama, Taro Fukue, Miki Miyato
1）目白大学（精神科医）
2）相州乳幼児家族心療センター（精神科医）
3）子どもの虹情報研修センター（臨床心理士）
4）相州乳幼児家族心療センター（臨床心理士）
5）横浜国立大学（臨床心理士）
別刷請求先：青木　豊　目白大学人間学部子ども学科　〒161-8539 東京都新宿区中落合4-31-1
Tel：03-5996-3152　Fax：03-5996-3163

Presented by Medical*Online

で，その実施には多大な時間と労力が必要となり，臨床現場での利用は極端に制限される。さらに2つの手法の評定には欧米での訓練もしくは資格の取得が必要で，わが国の現状においてこれらの手法によってアタッチメントを適切に評定し，アタッチメントに基礎づけられた介入をエビデンスに則って実践することは，臨床においても研究においても極めて困難である。そこで，信頼性・妥当性のレベルを適切な範囲で少し下げても，乳幼児に関わる広い領域で比較的簡易に利用できるアタッチメントの測定法の開発が期待される。SSP や Q-sort のように，長時間の観察や特別な施設，資格を必要としないアタッチメント評定法として，他者評定型の質問項目が，測定方法として候補となる。例えば，立元[4]は，Q-sort の観察項目を質問項目としてアタッチメントを評定しようと試みている。

そこで本研究では，簡便で，かつある程度のアタッチメント行動の安定度を把握できる尺度の作成を目的とする。アタッチメントの安定度は子どもの問題行動との関連が指摘され[5,6]，さらに，虐待の経験がアタッチメントの形成に悪影響を与えることがさまざまな研究によって指摘されている[7,8]。簡便にアタッチメントの安定度を把握できる尺度を作成することにより，臨床実践においてアタッチメントに問題を抱える子どもの第一次的なスクリーニングを可能とし，その後の必要な支援につなげられると考えられる。

先に述べたように，乳幼児期においてアタッチメントやその近接した側面を評定する簡便な尺度はほぼないと言える。そこで本研究では，Q-sort の項目を参考として ABCL 尺度候補項目を作成し，ABCL 尺度と養育問題のある子どものためのチェックリスト（Checklist for Maltreated Young Children；以下，CMYC）[9]および，子どもの行動チェックリスト1.5～5歳用（the Child Behavior Checklist；以下，CBCL）[10]との関連分析により，ABCL 尺度の構成概念妥当性を検討することを目的とする。

Ⅱ．対象と方法

1．調査対象

神奈川県中央児童相談所の合意と協力を書面で得て，神奈川県内の全ての児童養護施設に研究参加を依頼した。その結果，乳児院と児童養護施設，合計9つの施設が，調査研究に合意した。それらの施設において，調査開始時点において月齢10～50か月の全ての施設入所児を対象とした。本研究の対象となる乳幼児は，児童養護施設51名（平均月齢：36.06，SD＝8.62），乳児院61名（平均月齢：17.15，SD＝5.34）であった（表1）。

2．調査内容

①アタッチメント行動チェックリスト（ABCL）候補項目

臨床現場で利用しやすい簡便性を備え，アタッチメントの安定性に関連した行動を評定するため，アタッチメント行動制御システムとは必ずしも関連の高くない項目，例えば連携行動制御システム（Affiliation behavioral control system）と関係の深い項目を除外した。選択の基準として，Waters ら[2,3]の研究に則ってアタッチメントの安定度の高い順に15項目前後，反対に安定度の低い順に15項目前後の合計30項目を選んだ。その後，乳幼児の専門家によって項目の内容的妥当性を協議・検討し，最終的に29項目を選択し，「よく当てはまる」，「当てはまる」，「どちらでもない」，「あまり当てはまらない」，「全く当てはまらない」の5件法による質問項目を作成した。

②養育問題のある子どものためのチェックリスト（Checklist for Maltreated Young Children；CMYC）[9]

被虐待児の問題行動を評定することを目的に作成された尺度で，6か月～2歳未満用は27項目，2～6歳用は82項目の質問から構成されている。CMYC は，「トラウマ」，「アタッチメントの問題」，「感覚・行動調節」の3つの下位尺度によって構成されており，各下位尺度の素点の合計点は，T得点に変換される。本研究では，この下位尺度並びに「総得点」のT得点を用い

表1　調査時月齢，入所期間の記述統計

		N	月齢				入所期間			
			min	max	平均	(SD)	min	max	平均	(SD)
養護施設	虐待あり	18	24	47	36.39	(7.52)	0	22	8.00	(7.33)
	虐待なし	33	16	50	35.88	(9.27)	0	26	10.40	(8.83)
乳児院	虐待あり	23	10	26	16.61	(5.19)	0	22	6.78	(6.49)
	虐待なし	38	10	29	17.47	(5.48)	0	25	10.60	(8.17)
全体		112	10	50	25.76	(11.76)	0	26	9.32	(7.98)

Presented by Medical*Online

て検定を行った。

③子どもの行動チェックリスト1.5～5歳用（the Child Behavior Checklist；CBCL）[10]

乳幼児の問題行動を評定することを目的に作成された尺度である。1.5～5歳用のCBCLは米国において信頼性・妥当性が確立されており，わが国においても長沼ら[11]によって標準化が試みられている。100の項目から構成されており「内向尺度」，「外向尺度」の2つの下位尺度の項目の合計点と，その下位尺度得点を合算した「総得点」により評定を行う。本研究では，2つの下位尺度得点と「総得点」を用い，検定を行った。また本研究では1.5歳以下の乳幼児も対象としているため，CBCLは112名中81名にのみ施行した。

3．調査手順

児童相談所の担当者に児童の虐待の有無などを聴取し，施設職員に，ABCL，CMYC，CBCLの3つの質問紙の評定を依頼した。施設職員とは，児童養護施設・乳児院における児童の担当職員であり，代理養育者の役割を果たしている。

4．倫理的配慮

本研究に関しては，国立成育医療センターにおける情報の二次利用委員会の承諾を得た。

Ⅲ．結　　果

1．ABCL候補項目の因子分析

ABCL候補項目29項目に対して，主因子法プロマックス回転による因子分析を行った。その結果，因子負荷量が.40以下および複数の因子に対して負荷量が.30以上を示した5項目を除外し，残った24項目に対して再度主因子法プロマックス回転による因子分析を行った。因子抽出の基準を固有値1以上とし，因子負荷量，スクリープロット，解釈可能性から，3因子を抽出した。

第1因子は「あなたが「ちょうだい。」と言ったり「持ってきて。」と言うとそのようにしてくれる」や「自分からあなたと物を分けあったり，あなたが言うと，貸してくれたりする」など9項目からなり，乳幼児が養育者の意図・意志を理解し，それに協力できるかを示す内容であったため，『こころの理解』と命名した。第2因子は「あなたに対してわがままで気が短い，自分の望むことをあなたがすぐにしないとぐずぐず言ったり頑固に要求し続ける」や「遊びの後，あなたの方へ戻ってきたとき，はっきりした理由もないのにぐずることがある」など9項目からなり，いわゆる非安定型のアタッチメント行動であり，その中でも「抵抗型」の特徴を示していた。特に感情調節能力の低さを示していることから『感情調節不全』と命名した。感情の調節は，安全なアタッチメント形成において，最も重要な要素の一つにあげられている[12]。第3因子は「施設で遊んでいるとき，あなたの居場所を知っていて，あなたを呼んだり，あなたが居場所を変えたりすると気がつく」や「恐がったり機嫌が悪くなっても，あなたが抱くと，すぐに泣くのをやめ落ち着く」など6項目からなり，乳幼児が養育者を安全基地としてどれぐらい利用しているかを示していたため，『安全基地』と命名した。各因子についてクロンバックのα係数を求めたところ，第1因子が$\alpha = .91$，第2因子が$\alpha = .82$，第3因子は$\alpha = .86$であり（表2），下位因子の信頼性が確認された。各因子の項目を合算し，それぞれの下位尺度得点とし，以下の検定に用いた。

2．ABCLと月齢，入所期間との関連

月齢や施設入所後の期間がABCLにどのように関連しているかを検討するため，ABCLの下位尺度得点と「月齢」，「入所期間」とのSpearmanの相関係数を算出した。さらに，月齢への入所期間の，入所期間への月齢の影響を排除するため「月齢」とABCLの下位尺度得点との相関分析については「入所期間」を，また「入所期間」とABCLの下位尺度得点との相関分析については「月齢」を制御変数とし，それぞれの偏相関係数を算出した（表3）。その結果，「こころの理解」において「月齢」（$r = .430$），「入所期間」（$r = .275$）との間に1％水準の正の相関がみられた。また「安全基地」において「入所期間」（$r = .343$）との間に1％水準の正の相関がみられた。「感情調節不全」においては，有意な相関はみられなかった。

3．ABCLと子どもの問題行動との関連

ABCLと子どもの問題行動の関連を明らかにするために，ABCLの下位尺度得点とCMYCの総得点並びに下位尺度T得点，CBCLの総得点並びに下位尺度得点のSpearmanの相関係数を算出した（表4）。その結果，ABCLの「こころの理解」と「安全基地」に関しては，CMYC，CBCLの各下位尺度と有意な相

Presented by Medical*Online

表2　ABCLの因子分析結果（主因子法：プロマックス回転）

	因子 1	因子 2	因子 3
第1因子　こころの理解（α＝.91）			
15　あなたが「ちょうだい。」と言ったり「持ってきて。」と言うとそのようにしてくれる（ふざけていて従わない場合は考えに入れなくてよい）	.86	.04	−.05
11　自分からあなたと物を分けあったり，あなたが言うと，貸してくれたりする	.85	.03	−.08
4　「〜しなさい」と命令として言われなくても，「〜したら」と提案として言われただけでも，すぐにあなたの指示に従える	.82	−.16	−.12
17　あなたが子どもに何かを頼むと，あなたが何をして欲しいかすぐにわかる（従うか従わないかは問題としない）	.79	.12	−.05
5　あなたがついてくるように言うと，そのようにする（ふざけていて従わない場合は考慮に入れない）	.71	.00	.19
7　あなたが「大丈夫よ。」とか「怪我しないよ。」等と言って安心させるとはじめ用心したり怖がっていた物に近づいたり遊んだりする	.64	−.06	.12
13　新しくおもちゃになる物を見つけると，あなたにも見てもらいたくて，持ってきたり，離れたところからあなたに見せる	.58	.05	.26
8　何か恐そうに見えたり危なそうな状況にいると，あなたの表情を見てどうするか決める	.55	−.05	.06
14　あなたが促すと，はじめて会った人に喜んで話したり，おもちゃを見せたり，自分のできることをやって見せたりする	.54	.05	.03
第2因子　感情調節不全（α＝.82）			
24　子どもがして欲しいことをあなたがすぐにやらないと，まったくしてもらえないかのように振舞う（ぐずったり，怒ったり，あきらめて他のことをしたりする）	−.05	.69	.05
29　遊びの後，あなたの方へ戻ってきたとき，はっきりした理由もないのにぐずることがある	−.08	.69	−.12
21　あなたに対してわがままで気が短い，自分の望むことをあなたがすぐにしないとぐずぐず言ったり頑固に要求し続ける	.12	.65	.09
27　あなたが，子どもの今してる活動を止めさせ，次の活動をさせようとすると，すぐに機嫌が悪くなる（たとえ，新しい活動が子どものいつも喜ぶものであった場合も）	.01	.63	−.27
26　あなたに何かして欲しいときに，行動で示したり言葉で頼んだりするのではなく，泣いたりぐずったりして訴える	−.26	.63	.26
23　あなたに抱かれているとき，降ろして欲しいと合図するので降ろすと，ぐずったり，またすぐ抱いて欲しいと要求する	−.06	.62	.10
18　すぐにあなたに腹を立てる	.16	.56	−.05
28　活発な遊びの中で，たたいたり，ひっかいたり，噛みついたりして乱暴になる（必ずしも，あなたを傷つけようというつもりはない）	.10	.51	−.12
25　あなたがちょっと手伝おうとしただけでも，していることを邪魔されたかのように振舞う	.06	.49	−.11
第3因子　安全基地（α＝.86）			
1　施設で遊んでいるとき，あなたの居場所を知っていて，あなたを呼んだり，あなたが居場所を変えたりすると気がつく	−.05	.14	.82
16　あなたが抱き上げたり，抱きしめたり，可愛がると喜び，自分からもそれを要求する	.00	−.11	.77
12　あなたが部屋に入ってくると，自分の方から大きな笑みを浮かべてあなたに語りかけたり，手を振ったり，おもちゃを見せたりする	.04	−.20	.74
3　恐がったり機嫌が悪くなっても，あなたが抱くと，すぐに泣くのをやめ落ち着く	−.03	−.26	.63
2　探索のための安全基地としてあなたを利用するパターンをはっきり示す。遊びに出かけ，またあなたの方へ戻って，近くで遊び，次に再び出かけるというようなことを繰り返す	.17	.18	.59
9　あなたがかなり遠くに行くと，後を追ってあなたの近くで遊びを続ける（呼んだり，運んでやる必要はなく，また遊びをやめたり機嫌が悪くなることもない）	.07	.16	.59
因子間相関 F1	—	.15	.52
F2		—	.17
F3			—
固有値	7.07	3.98	2.19
累積寄与率（%）	29.44	46.03	55.17

表3　ABCLと基礎統計の関連

	月齢	入所期間
こころの理解	.430**	.275**
感情調節不全	−.027	−.105
安全基地	−.121	.343**

**p＜.001，*p<.05

Presented by Medical*Online

表4　ABCLとCMYC，CBCLにおける各下位尺度間の関連

		CMYC				CBCL		
		トラウマ	愛着の問題	感覚・行動調節	総得点	内向	外向	総得点
ABCL	こころの理解	−.083	−.016	−.013	.045	−.100	−.015	−.079
	感情調節不全	.231*	.130	.303**	.246*	.309**	.415**	.393**
	安全基地	−.056	.116	.153	.063	−.047	.058	.000

**p < .001，*p<.05
注）本研究のCBCLは1.5～5歳の子どもを対象としているため，1.5歳以下の対象は検定から除外した。

表5　非虐待群―虐待群間のABCL，CMYC，CBCLについての差の検定

		非虐待群		虐待群		U値
		平均値 SD	中央値	平均値 SD	中央値	
ABCL	こころの理解	32.52（ 7.86）	34.08	29.01（10.75）	32.60	1,221.0
	感情調節不全	23.06（ 6.98）	22.67	22.12（ 8.42）	21.83	1,322.0
	安全基地	24.28（ 5.13）	25.23	22.61（ 5.34）	24.43	1,175.0
CMYC	トラウマ	56.59（15.71）	51.94	55.68（14.59）	52.20	1,299.0
	愛着の問題	51.52（15.00）	48.75	48.64（13.74）	46.60	1,161.0
	感覚・行動調節	63.41（15.99）	60.20	60.92（15.56）	59.00	1,243.0
	総得点	57.65（15.23）	55.00	54.44（14.66）	52.14	1,094.0
CBCL	内向	6.98（ 6.91）	5.13	4.21（ 4.20）	3.00	584.5
	外向	12.98（10.39）	10.33	10.88（ 9.57）	8.33	674.5
	総得点	43.64（34.81）	32.00	33.18（28.34）	29.00	651.5

注）本研究のCBCLは1.5～5歳の子どもを対象としているため，1.5歳以下の対象は検定から除外した。

関はみられなかった。一方，ABCLの「感情調節不全」においては，CMYCの「感覚・行動調節」（r = .303），CBCLの「内向」（r = .309），「外向」（r = .415），「総得点」（r = .393）との間に1％水準の正の相関がみられ，CMYCの「トラウマ」（r = .231），「総得点」（r = .246）との間に5％水準の正の相関がみられた。

4．非虐待群―虐待群の比較

評価対象となった乳幼児の虐待経験とABCLの関連を検討するため，非虐待群と虐待群のABCLについて比較検討を行った。まず，児童相談所の判定から，施設入所以前に虐待を受けていない子どもを「非虐待群」，虐待を受けていた子どもを「虐待群」とした。その結果，「非虐待群」が71名（平均月齢：26.03，SD＝11.86），「虐待群」が41名（平均月齢：25.29，SD＝11.73）となった。「非虐待群」，「虐待群」の2群について，ABCL，CMYC，CBCL（年齢制限のあるCBCLは，虐待群29名，非虐待群52名）の各下位尺度得点を算出し，Mann-WhitneyのU検定を行った。その結果ABCL，CMYC，CBCLのいずれにおいても，「非虐待群」と「虐待群」の間で，有意な差はみられなかった（表5）。

Ⅳ．考　　察

1．ABCLの構造とその解釈

ABCLは，因子分析の結果，「こころの理解」，「感情調節不全」，「安全基地」の3因子構造であることが確認され，それぞれについて信頼性が確認された。

さらに，項目内容から，ABCLそれぞれの因子について以下のように解釈される。まず「こころの理解」は，養育者の意図・意志を理解し，それに協力できる程度を示している。Bowlby[13]により，特に2歳以上の乳幼児―養育者のアタッチメント関係の主要な要素は，目的修正的パートナーシップと呼ばれている。乳幼児の側から見れば，この要素は養育者の目的に向かっている意図・意志を理解して，養育者と交渉して協力する程度を示している。「こころの理解」因子は，このような目的修正的パートナーシップを反映していると考えられることから，アタッチメント行動の安定した傾向を測定していると推測される。次に「感情調節不全」は，その項目内容から子どもが自らの不安や欲求不満，怒りなどの不快な情緒を愛着対象である養育者との関わりを通して調節し，養育者と安心・安定した関係性を築くことが難しい程度を反映している。また多くの研究が，感情の調節機能はアタッチメントの形成とその機能の中心的要素であることを示してい

Presented by Medical*Online

る[14,15]ことからも，「感情調節不全」は，アタッチメント行動の安定性を欠く傾向を測定していると推測される。最後に「安全基地」の概念は，安定的なアタッチメント行動の表れとされている[1,13]。本研究で作成された項目内容からも，子どもが施設内の愛着対象である担当職員を安全基地として利用可能であることを示しており，アタッチメント行動の安全な傾向を測定していると言える。このように「こころの理解」と「安全基地」はアタッチメント行動の安定した側面を，「感情調節不全」はアタッチメント行動の不安定な側面を測定・評価していることが示唆された。

2．ABCLと月齢および入所期間との関連

子どもの成長発達や，子どもが代理的な愛着対象を得て養育される体験が，ABCLにどのように関連するかを明らかにするために，ABCLの下位尺度得点と「月齢」，「入所期間」の相関を検討した。その結果，「月齢」，「入所期間」と「こころの理解」の間に正の相関がみられた。月齢が増し中枢神経系がより成熟し，認知・社会・感情的な発達が進み，この発達を基盤にして，入所期間が増すことによって乳幼児は代理養育者（担当職員）の「こころをより理解」できるのであろう。この発達を基礎として，乳幼児―職員の関係が，より発展した目的修正的パートナーシップに向かうことが示唆される。また，「安全基地」は，「入所期間」と弱いものの有意な正の相関を示した。このことから，入所期間が長くなることによって，職員が愛着対象となり，安全基地としてより利用できるようになることが示唆された。一方，「感情調節不全」は，「月齢」，「入所期間」とは有意な相関を示さなかった。従って，施設職員という代理の愛着対象に対する安定度の低いアタッチメント行動は，容易に軽減しないことが示唆された。

臨床的には入所期間が長くなることにより，子どもと職員の関係は形成されていくが，必ずしも感情調整などの問題行動は軽減されない場合も少なくなく，本研究の結果は，この点を反映しているのではないかと推測される。

これらの結果をまとめると，本研究の対象では，職員とのアタッチメントは，より安定した方向に向かっているように思える結果（「こころの理解」，「安全基地」）と，そうでない結果「感情調節不全」が混在している。何らかの事情（被虐待歴を含む）で養育者と分離する体験を経た乳幼児は，アタッチメント形成が危機的状況にあることは容易に推測される。研究時点での施設環境では，担当職員に十分には安定したアタッチメントを形成することが困難であるのかもしれない。

3．ABCLと子どもの問題行動との関連

ABCLが子どもの問題行動と関連しているかを明らかにするために，ABCLとCMYC，CBCLとの関連を検討した。その結果，安定性の低いアタッチメント行動を示す「感情調節不全」と，CMYCの「トラウマ」，「感覚・行動調節」，「総得点」で関連がみられた。CMYCは養育環境に問題を抱える子どもの行動を想定して作成されている。安定性の低いアタッチメント行動を示す「感情調節不全」とCMYCの「総得点」の間に関連がみられたことは，ABCLの併存的妥当性の指標の一つと考えられる。また下位尺度では「トラウマ」，「感覚・行動調節」と関連を示しており，このことからトラウマティックな行動をとりやすく，情緒のコントロールに問題があると評定される子どもは，安定度の低いアタッチメント行動をとりやすいことが示唆された。さらに，「感情調節不全」が高いことは，CBCLの「外向」，「内向」，「総得点」の高さとも関連を示していた。CBCLは子どもの問題行動を評定するものである。これらの結果は，従来の研究[16,17]におけるアタッチメントの安全度が子どもの問題行動と関連しているという指摘とも一致する結果である。以上のことから，ABCLの「感情調節不全」は，自らの不安や欲求不満，怒りなどの不快な情緒を愛着対象である養育者との関わりを通して調節し，安心・安定した関係性を築くことが難しいという，安定度の低いアタッチメント行動を評定していることが確認された。一方で，「こころの理解」，「安全基地」は，CMYC，CBCLのどの項目とも有意な関連を示さなかった。すなわち安定度の高いアタッチメント行動が問題行動の抑制や軽減に関連していることが示されなかった。この結果は本研究が施設入所児という独特な養育環境にいる子どもを対象としているため生じたのかもしれない。すなわち本研究の対象は，被虐待歴を持つか少なくとも施設入所措置をせざるを得ない条件があり，養育者との分離を体験し施設での養育を受けている乳幼児たちである。これら乳幼児がアタッチメントを含んだ深刻な社会・感情的問題を持って施設入所し，施設

Presented by Medical*Online

環境下でそれら問題が容易に改善しないとの所見が得られている[4,5]。このように比較的重度の精神病理を有する可能性の高い乳幼児については，アタッチメントの安定度を測定する際敏感に反応するのは，「感情調節不全」であり，「こころの理解」，「安全基地」ではないのかもしれない。しかし，本研究の結果からだけではそれ以上の推論は不可能であり，今後の研究課題の一つと考えられる。

4．ABCLと虐待経験との関連

「虐待群」と「非虐待群」の2群に分け，ABCL，CMYC，CBCLの各下位尺度得点を比較した結果，「虐待群」と「非虐待群」の比較において，顕著な差はみられなかった。これらの結果は，虐待の経験がアタッチメントの形成に影響を与えるとの指摘[7,8]とは一致しない。しかし，同一児が異なる養育者に異なるアタッチメントの型・質を示すという，「関係性特異性」があることは実証研究により示唆されている[16,17]。本研究では，虐待した養育者とのアタッチメントの安定度ではなく，施設担当職員とのそれをABCLで測定している。したがってABCLによって測定される被虐待児の施設職員へのアタッチメントの安定性の程度については，虐待群と非虐待群では差がみられなかったと推測され，「関係性特異性」の観点からは妥当な結果かもしれない。一方，本研究では虐待経験の有無だけでABCLを比較しており，入所期間などについては考慮していない。入所期間とABCLとの関連を検討した本研究の結果からも，入所期間と安全度の高いアタッチメント行動との関連が示唆されている。「虐待群」と「非虐待群」についてABCLを用いた比較については，今後さらに検討する必要がある。

5．まとめ

ABCLについて，因子分析の結果得られた3因子構造は，一定の信頼性を示し，また構成概念も一定程度妥当であると考えられる。「こころの理解」，「安全基地」が月齢や入所期間と相関を示したこと，また「感情調節不全」がCBCL，CMYCの総得点並びに下位項目と相関を示したことから，部分的にではあるものの併存的妥当性も確認された。しかし，アタッチメントの安定性を示す「こころの理解」，「安全基地」がCBCLやCMYCと負の相関を示さなかったなど，精査すべき課題は残った。

6．今後の課題

本研究の限界と課題には，以下の諸点が挙げられる。第一に，ABCLの項目は，妥当性の確立したQ-sort法のアイテムから約1/3のみを選択して形作られている。そのため，アタッチメント全体の概念をABCLは十分には包括できていない可能性がある。今後ABCLの限界についても十分に精査する必要がある。第二に，ABCLが他者評定型の質問項目であることから，評定者のバイアスがかかることは避けがたく，今後評定者のバイアスの影響について検討する必要がある。第三に，ABCLにおいて安定的なアタッチメントを評定する「こころの理解」，「安全基地」とCMYC，CBCLが負の相関を示さなかったことは，さらなる調査を行い精査する必要がある。本研究の調査対象となったのは施設入所の乳幼児であるため，特異な集団であり，また調査対象者の人数も必ずしも多くない。そのためABCLを研究，臨床で実際に使用するためには，施設入所児だけではなく，保育園や幼稚園に通っている定型発達児とその代理養育者あるいは養育者たる保育士，実父母などに対象を変えて検討を行い，その構造や信頼性を確認し，アタッチメント行動測定の尺度として精緻化していく必要があると考えられる。

本研究は，平成17～19年度厚生労働科学研究費補助金によるこども家庭総合研究事業「児童虐待等の子どもの被害，及び子どもの問題行動の予防・介入・ケアに関する研究」の援助を得ている。

利益相反に関する開示事項はありません。

文　献

1) Ainsworth M, Blehar M, Water E, et al. Patterns of attachment, a psychological study of the Strange Situation. New Jersey：Erlbaum Associates, 1978.

2) Waters E, Daene KE. Defining and assessing individual differences in attachment relationships：Q-methodology and the organization of behavior in infancy and early childhood. Monographs of the Society for Research in Child Development 1985；50：41-65.

3) Water E, Vaughn, Egland BR. Individual differences in infant-mother attachment relationships at age

Presented by Medical*Online

one：Antecedents in neonatal behavior in an urban, economically disadvantaged sample. Child Development 1980；51：208-216.

4) 立元　真．乳幼児保育・教育のための保育者―子ども間の愛着関係測定の試み（1）AQSをもとにした測定尺度作成の試み．宮崎大学教育学部紀要　1998；85：35-51.

5) Berlin L, Cassidy J, Appleyard K. The influence of early attachment on other relationships. Cassidy J, Shaver P (eds.). Handbook of Attachment second edition. New York：Guilford Press, 2008：333-347.

6) Thompson R. Early attachment and later development：Familiar Questions, New Answer. Cassidy J, Shaver P (eds.). Handbook of Attachment second edition. New York：Guilford Press, 2008：348-366.

7) Schechter D, Willheim E. The effect of violent experiences on infants and young children. Zeanah C (ed.). Handbook of Infant Mental Health third edition. New York：Guilford Press, 2009：197-213.

8) 数井みゆき．子どもの虐待とアタッチメント．数井みゆき，遠藤利彦編著．京都：ミネルヴァ書房，2007：79-95.

9) 泉 真由子，奥山眞紀子．「養育問題のある子どものためのチェックリスト（Checklist for Maltreated Young Children：CMYC）」の開発．小児の精神と神経　2009；49：121-130.

10) Achenbach TM. The Child Behavior Checklist and related forms for assessing behavioral/emotional problems and competencies. Pediatrics in Review 2000；21：265-271. 児童思春期精神保健研究会訳，2002.

11) 長沼葉月，北　道子，上林靖子．ASEBA就学前子どもの行動チェックリスト親記入様式および保育士・幼稚園教諭記入様式の日本語版の開発．小児の精神と神経　2012；53：193-208.

12) Soufe A. Emotional Development. Cambridge, England. New York：Cambridge University Press, 1996.

13) Bowlby J. Attachment and loss：Vol.1. Attachment. New York：Basic Books, 1982. (Original work published 1969).

14) Sroufe A. Psychopathology as outcome of development. Development and Psychopathology 1997；9：251-268.

15) Thompson RA, Meyer S. The socialization of emotional regulation in the family. In J. Gross (Ed.), Handbook of emotional regulation. New York：Guilford Press, 2007：249-268.

16) 青木　豊．乳幼児―養育者の関係性：アタッチメントと精神療法．東京：福村出版，2012.

17) Ijendoorn M, Wolff M. In Search of the Absent Father-Meta-Analyses of Infant-Father Attachment：A Rejoinder to Our Discussants. Child Development 1997；68：604-609.

〔Summary〕

The object of this article is to develop the Attachment Behavior Checklist (ABCL), and research Cronback Alpha reliability and validity of it . The sample was 10-50 month-old children in 9 institutions. The measures were demographics, ABCL, and CMYC. Data was analyzed into 3 factors "Understanding of Caregivers mind", "Disregulation of emotions", and "Secure base" in ABCL, contributing internal consistency. And the factor, "Disregulation of emotions" had correlations to "trauma" and "regulation of sensation and behaviour" of CMYC, and the duration during which children had lived the institutions also had correlation with the factor, "Secure base". These outcomes contribute validity of ABCL. On the other hand our hypothesis did not support some outcomes in this survey. The future research is needed.

〔Key words〕

attachment, questioner, reliability, validity, infant

Presented by Medical*Online